

第 11 回 松江藩士松原基と『消暑漫筆』

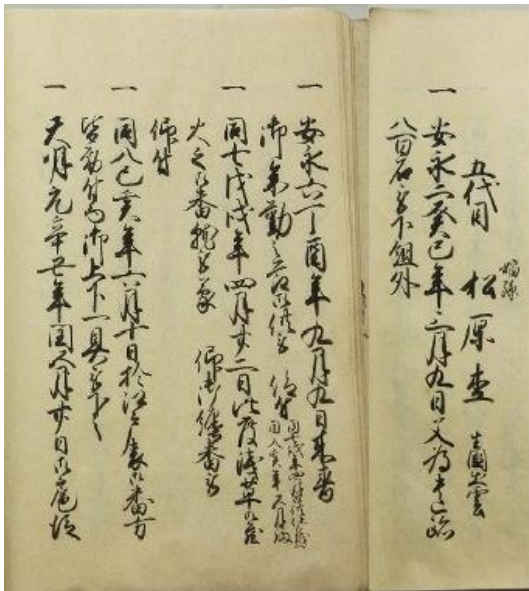
かつて松江藩には、松原基(まつばら・もとい, 1749~1820)という藩士がいました。18 世紀の後半から 19 世紀の初めにかけてを生きた人物です。ここでは、一般にはあまり知られていないこの松原基という人物と、彼の遺した一大叢書『消暑漫筆』全 150 巻などについて紹介しようと思います。

松江藩士 松原基

『列士録』

松江藩士の公的履歴を記録した藩政史料『列士録』の松原基の部分。

松原五郎大夫家の「五代目松原壺」が松原基にあたる。



松江藩士の家に生まれた松原基(通称壺)は、安永 2 年(1773)25 歳のときに家督を継いで出仕しました。継いだ禄は 800 石ですから、松江藩士のなかでも上層に位置していたと言えます。出仕後は、江戸表番方、扨従番頭役、御書所勤め、御年譜御用懸、大番頭役などを勤めたのち、寛政 2 年(1790)には格式中老、仕置添役を仰せつけられて、藩政の中枢までのぼりつめることになります。

しかしながら、その後まもなく大番頭だった頃に提出した上書『救士策』が藩当局の忌避に触れ、翌寛政 3 年(1791)冬には仕置添役を免ぜられて、失脚してしまうことになります。中老格のままではあったもの

の、その後文化 12 年(1815)に隠居するまでにつとめたのは、閑職ばかりでした。

『消暑漫筆』の成立過程

『消暑漫筆』自序

『消暑漫筆』正編初編初筆冒頭の「消暑漫筆自序」の書き出し部分。

この自序は、正編三編十筆まで完成した享和元年(1801)冬に書かれた。



松原基が『消暑漫筆』の稿を起こしたのは寛政4年(1792)年の春です。失脚後に新しい年を迎えるにあたって新春から思いを新たに筆をとったものと思われます。ときに松原基44歳でした。その後、寛政10年(1798)末までの丸7年間をかけて初編初筆～十筆全10巻が、寛政11年(1799)・寛政12年(1800)の2年間をかけて二編初筆～十筆全10巻が、享和元年(1801)の1年間をかけて三編初筆～十筆全10巻が成立しています。松原基は享和元年の末に『消暑漫筆』の序文と凡例を書いていますから、ここまでが『消暑漫筆』の成立過程の第1段階ということになるでしょう。

松原基は、享和2年(1802)以後も『消暑漫筆』の四編以降を書き継いでいき、文化5年(1808)9月の時点で九編六筆まで至っていました。全86巻ということになります。ここまで『消暑漫筆』を書き継いできた松原基は、これを全100巻にしたいと考えて、『消暑漫筆』とは別に著

していた著作などを統合します。このようにして、『消暑漫筆』正編の初編初筆から十編十筆に至る全100巻は、文化5年(1808)の秋に成立することになりました。その後、文化6年(1809)春から文化10年(1813)夏にかけて続編の初編初筆から五編十筆に至る全50巻が書き継がれ、『消暑漫筆』は正編100巻、続編50巻、全150巻の一大叢書となります。

松江藩の教学政策と松原基の思想

『消暑漫筆』の内容について紹介する前に、松江藩の教学政策や松原基の思想について簡単に触れておきましょう。

教学政策という観点からすると、松江藩の歴史のなかで重要な画期となっているのは、18世紀の半ばです。荻生徂徠門下の宇佐美しん水(1710～1776)と林家塾出身の桃白鹿(1722～1801)が召し抱えられて、以後宇佐美家と桃家の当主が代々松江藩儒をつとめるようになるのが、この時期だからです。しん水が召し出されたのは寛延元年(1748)、白鹿が召し出されたのは宝暦7年(1757)で、以後、しん水は江戸詰の藩儒として江戸の藩邸で、白鹿は国許詰の藩儒として松江の藩校文明館(のち明教館と改称)で、それぞれ藩家臣団の教化などにあたりました。



荻生徂徠(左)と宇佐美しん水(右) (島根県立図書館蔵『先哲像伝』)

ところで、しん水は荻生徂徠門下、白鹿は林家塾(林羅山に始まる林家の塾)出身でしたから、松江藩には二つの学風が存在したことになります。国許の松江では桃家の学風が主でしたが、江戸詰藩儒宇佐美しん水と彼を通じた徂徠学派のネットワークの影響も少なからずありました。

とくに、園山家の三代目の酉山(1753~1821)が儒者への家業替えを前提として儒学出精を仰せつけられ、安永5年(1776)以後儒学修行や江戸勤番のため松江と江戸を行き来するようになってからは、松江での徂徠学の影響力が強まっていったように思われます。酉山は江戸ではじめは宇佐美しん水に、しん水没後はその門下の豊島豊洲に従学しましたから、それは当然のことであつたでしょう。酉山が足掛け4年に及ぶ2度目の江戸長期滞在を終えて帰国するのは天明6年(1786)年4月のことですが、おそらくこれ以後はとくに松江でも徂徠学の影響力が強まっていったのではないのでしょうか。

松原基は、桃白鹿に学び、藩校文明館での会読などにも参加していたのですが、桃家の学風には馴染みきれないところがあつたようで、荻生徂徠に私淑して徂徠学を信奉し、同世代の園山酉山と親しく交わっていました。松原基には、学問の難しさを論じた『学難』という著作がありますが(『消暑漫筆』正編二編九筆所収)、同書の「凡例」には「此編ノ大旨、来翁(=荻生徂徠)ノ教示ニ出ズ」とあり、松原基が徂徠学の影響をいかに強く受けていたかがわかります。松原基が徂徠学を信奉していたという点は、『消暑漫筆』の内容とも大きく関わってきます。

『消暑漫筆』の内容

『消暑漫筆』は全150巻という膨大な分量にのぼりますが、そのすべてが松原基の著作であるわけではなく、彼の著作は全体の3割弱で、残りの7割強は彼の手になつた写本です。

先に写本のほうからその内容を概観してみますと、まず目につくのは、荻生徂徠・太宰春台・服部南郭・山県周南・瀧鶴台や松江藩儒の宇佐美しん水・園山酉山といった徂徠学派の学者たちの著作や関係資料です。園山酉山の『受業略説』『易道略説』など、現在では『消暑漫筆』によってしか読むことのできない貴重な写本も含まれています。そして、次に目につくのは、膨大な分量の新井白石の著作です。たとえば、松原基は、文化3年(1806)年3月から翌年の2月にかけて『藩翰譜』をまるまる筆写しており、『消暑漫筆』正編の六編・七編全20巻がこれに充てら

れています。そのほか、『折たく柴の記』(続編四編初～四筆)・『読史余論』(続編四編五～十筆)・『白石先生遺稿』(続編五編初～十筆)など、数多くの白石の著作が筆写されています。

『消暑漫筆』所収『朝鮮語訳』

松原基が筆写した『朝鮮語訳』の中巻冒頭部分(『消暑漫筆』正編十編六筆1丁オモテ)。「朝鮮語訳」は、荻生徂徠の高弟服部南郭の識語を有する。江戸の徂徠学派の蔵書を園山西山が筆写して松江に持ち帰ったものを松原基が筆写して『消暑漫筆』に収めた。なお、園山西山も松原基もハングルを読み書きできたわけではないので、朝鮮語として見るとこの写本は誤りが甚だしい。



また、『消暑漫筆』には、たとえば『朝鮮語訳』全3巻(正編十編五～七筆)のような、ほかではなかなか見ることのできない写本がしばしば含まれています。地方城下町の松江に暮らしていた松原基がこのような珍しい書物を筆写することができたのはなぜかということが問題になるわけですが、松原基は主に園山西山に頼み込んでその蔵書を筆写させてもらっていたようです。『朝鮮語訳』の場合に即して見てみますと、服部南郭の識語を有するこの書が南郭の蔵書に含まれていたことは間違いありません。そして、そういった情報は江戸の徂徠学派のあいだではある程度共有されていたものと思われます。園山西山は、江戸滞在中に、徂徠学派のネットワークを通じて、この書の存在を知るとともに、借覧して筆写する機会を得ました。松原基は、そのようにして江戸で形成された園山西山の蔵書を松江で

筆写させてもらったのです。このような点に注目するなら、『消暑漫筆』は、江戸の徂徠学派と地方の徂徠学を奉じる武士たちとの関係を考えるうえでの重要な手がかりであるとも言えるでしょう。

松原基の著作については次項であらためて触れますが、『消暑漫筆』全150巻のうち、十数巻分は、正編の初編初～六筆をはじめとして、松原基の随筆であり、とくに注目されます。この部分からは、松原基の思想的立場を知ることができるとともに、彼の関心の幅広さをもうかがうことができます。

松原基の著作

『消暑漫筆』正編の初編十筆には、寛政10年(1798)50歳の時点での松原基の「著述編集書目」が掲載されています。この「著述編集書目」で松原基は自分の著作を3つに分類して挙げているのですが、第1のグループとして挙げられているのは、次のような著作です。

『増補新記言』3巻	『事格挈領』2巻	『從駕要領』1巻
『隊長末事』1巻	『国令』7巻	

第1のグループとして挙げられているこれらの著作は、松原基個人の私的な著作ではなく、公務の一環としてまとめられたものです。「著述編集書目」では「書局中の官書」とされていますので、松原基が御書所勤めをしていた当時にまとめられて御書所に備えつけられたのではないかと考えられます。これらは公務の一環としてまとめられたものでしたから、松原基は、松江藩の藩法集である『国令』を例外として、手許に写本を残しませんでした。そのため、『国令』以外の著作については現在その具体的内容を知ることはできないのですが、タイトルから推すと、藩政マニュアルのような著作だったのではないかと考えられます。これらは、統治の合理化を志向する徂徠学を奉じた松原基らしい著作であり、彼の能吏としての側面をうかがわせるものであると言えるでしょう。

第2のグループとして挙げられているのは、次のような著作です。これらは、大番頭役から中老となった時期の著作で、いずれも現在は伝わっていません。

『鎌府三世遺事』4 卷	『上代君臣事蹟略』2 卷	『白川侯政令叢』1 卷
『論天命』1 卷	『救弊策』1 卷	

このうちの『救弊策』は、失脚の原因となった上書『救士策』と同じものを指しているのかもしれませんが。いずれにせよ、失脚の原因となった彼の上書の発見が待たれます。

第3のグループとして挙げられているのは、次のような著作です。これらは、寛政3年(1791)冬の失脚から「著述編集書目」が書かれた寛政10年(1798)冬までのあいだにまとめられたものです。『消暑漫筆』正編に収められているものについては、どこに収められているか注記しておきます。

『孟子識小補』1 卷(九編八筆)	『詩書錯』2 卷(九編九筆)	『詩書彙藻』2 卷(十編初～二筆)
『左伝類語』2 卷(十編三～四筆)	『述懐十条』(所在不明)	『訳筌題言考』1 卷(五編六筆)
『管子武事』1 卷(九編十筆)	『管子考』1 卷	『上二大夫書』1 卷(五編八筆所収の『消間戯談』『為学志こく』の序文がこれにあたるか?)
『消間戯談』2 卷(序文のみ五編八筆)	『傍註歴代国号歌』1 卷(九編十筆)	『四声登高其則』1 卷(四編八～十筆)
『為学志こく』1 卷(序文のみ五編八筆)	『皇和年表旋轉全図』1 面(所在不明)	同『掌中略図』1 面(所在不明)

上記のほかに、『消暑漫筆』正編には、次のような著作が収められています。

『学難』(二編九筆)	『於曾留遍志』(三編初筆)	『根無艸』(四編初筆)
『読論衡』(五編四筆)	『老語韓義』(五編七筆)	『国初侯家稀聞』(九編初～四筆)
『篆刻采覧』(十編八～十筆)	『古今印名』(十編十筆)	

これらの松原基の著作について指摘できるのは、やはり徂徠学の影響が強いという特徴です。学問方法の面でも、学問内容の面でも、松原基ははっきりと徂徠学を踏まえていました。たとえば、松原基の著作のうちの『訳筌題言考』は荻生徂徠が学問の方法を論じた『訳文筌蹄』『題言』の注釈書であり、『孟子識小補』は未完に終わった荻生徂徠の『孟子』注釈書『孟子識』の続編にあたります。

晩年の松原基

松原基筆写本『大日本史』

島根県立図書館所蔵『大日本史』の冒頭部分(第1分冊1丁オモテ)。島根県立図書館所蔵の『大日本史』全65冊は、松原基が藩校明教館所蔵本を文化11年(1814)3月から文政元年(1818)7月にかけて筆写したものである。写真は、冒頭に冠せられた松原基「謄写大日本史序言」(文政元年七月晦)の書き出し部分にあたる。



『消暑漫筆』続編の全50巻が成立したのは、文化10年(1813)夏のことです。ときに松原基65歳でした。その後文政3(1820)年に72歳で亡くなるまでの松原基についてわかっているのは、文化11年(1814)年3月から文政元年(1818)年7月にかけて、藩校明教館所蔵の『大日本史』を筆写したということです。現に島根県立図書館には松原基の筆写した『大日本史』全65冊が所蔵されています。足掛け5年に及ぶ大仕事でした。

なお、『大日本史』の筆写終了後に作成された松原基自筆の『消暑漫筆』「総目録」では、続編は『大日本史』65冊を含む全115巻とされており、晩年の松原基は筆写を終えたばかりの『大日本史』も『消暑漫筆』の一部をなすものと位置づけていたことがわかります。(ただし、松原基筆写本『大日本史』各冊の内題・外題等には「消暑漫筆」の名は見えず、これを『消暑漫筆』の一部

と見るのはやや無理があるように思いますので、ここでは一応独立した写本として扱っておきます)。

そして、この『消暑漫筆』「総目録」についてさらに興味深いのは、『消暑漫筆』の「総目録」を記し終わった次の丁の1行目に、「菟裘漫筆総目」とあることです。『菟裘漫筆』についてはこの一行しか書かれていませんので、確かなことはわかりませんが、『大日本史』を筆写し終わった松原基は、『菟裘漫筆』という名の新たな叢書を書き継いでいこうと考えていたのではないかと思われる。残念ながら松原基に『菟裘漫筆』を書き継いでいくだけの時間は残されていなかったわけですが、松原基の学問への意欲は最期まで衰えることがありませんでした。

このように、松原基は、最期まで学問に励みました。高い能力を持っていたにもかかわらず政治的に不遇であったことが、かえって彼を学問にのめりこませたようにも思えます。彼は江戸時代の好学武士のなかでも特筆すべき人物の一人であると言えるでしょう。彼の遺した膨大な資料の研究が今後盛んになることが望まれます。

松原基の菩提寺 清光院(松江市外中原町)



松原基の墓所については青山侑市さんより御教示いただきました。

(平成 23 年 8 月 1 日 近世部会 宇野田尚哉)